

芸備線ストロール⑩ 東城駅

「名所・旧跡の宝庫 歴史に彩られた城下町」

家を出たのは、午前6時よりも10分以上も前。車で行くのは初めての駅なので、距離が延びると道に迷ったときが心配で早出する。朝霧が出て、まるで水墨画のように遠く山並みが霞んでいる。今日は八月十五日、終戦記念日だ。備後八幡駅の前に車を停めて、7時19分発の新見行きに乗った。駅の周辺には、待宵草が黄色い花

を咲かせている。萎んだ花が多いのは、夕方に開花して朝には萎んでしまう花が多いから。月見草とも呼ばれる。ローカル線にも、月見草はよく似合う。純和風のイメージだが、意外にもアメリカ原産の帰化植物だ。乗客はわたしを入れて三人ばかり。旅行客なのか、スマ

ホを持った中年男性が車内をあちこち移動して動画を撮影していた。蛇行する東城川（成羽川）の鉄橋を何度か渡りながら、10分ほどで東城駅に到着した。料金は210円、降車したのはひとり。東城には仕事で一年以上も車で通勤した時期があるのだが、芸備線を利用したのは初めてだった。東城駅は、改修前の備後庄原駅と構造や雰囲気似ている。屋根のある跨線橋が設置されているのだが、列車が行き交うための対面式ホームが、ダイ

ヤの減便で必要なくなったために、老朽化もあって階段の入口が板で塞がれている。城下町の東城は、歴史のある町だ。名所・旧跡も数多く、観光パンフレットも充実している。最初に、駅の南側にある千手寺を訪問した。曹洞宗の寺院で本尊は千手観音、高台にある境内に至る斜面には、多くの墓石が並んでいる。寺伝によると、創建は奈良時代。その後、宮氏によって再建され、毛利氏による国替えで五品嶽（ごほんがたけ）城主となった佐波広忠や、長尾隼人の菩提所である。



千手寺の参道の中腹に「長尾隼人供養塔」がある。

長尾隼人は、関ヶ原の合戦後に広島藩主となった福島正則の三家老の一人で、当地に配属された。長い石段の参道を登ると、その中腹の左側に「長尾隼人供養塔」がある。県北最大級の美しい五輪塔で、東城の町並みが一望できる。その向こうには、五品嶽城跡の標高484mの城山（通称）が鎮座している。町中を散策した。「ぶらり散歩マップ」に、「備後東城の七胡（えびす）」が紹介されている。広島の子神から勧請されたといわれている。縁起の良さから七胡と呼ばれているが、本当は十胡？ しか

し、他のパンフレットには九胡、あるいは八胡と書かれていて、ちょっとミス터리アス。小さな社が町角にバランスよく配置されているので、散策の中継の目的地にはちょうどいい。

途中、国登録有形文化財に登録されている「三楽荘」（旧保澤家住宅）を見学した。明治24年に上棟されたが、後年、旅館として改装された。古式を守った二階建ての町屋建築の豪邸で、東城の歴史と文化を伝える施設として無料で入館できる。個性ある大小の部屋や花形の虫籠窓、天井や欄間の様々な意匠等々、トイレ



に至るまで風情がある。「陰影礼賛」という言葉が浮かんだ。

広い縁側に腰かけると、日本庭園の池で錦鯉が泳いでいる。藍染の暖簾が風で揺れている。旅館業を営んでいるときに宿泊するべきだったと後悔した。わたしが東城に通勤していたのは15年余りも前のことだが、なじみの本屋さんも、純喫茶の看板のある喫茶店も閉店していた。

三楽荘の斜め前にある「まちなかギャラリー」に立ち寄った。昔ながらの赤い郵便ポストが目印で、上町自治振興区が運営している。昭和のレトロな生活用品が展示されていて懐かしい。一際目を引くのが、巨大

な二機の映写機（写真上）。東城には「偕楽座」という映画館が存在した。明治40年、当初は演劇場としてスタート、エンタツ・アチャコもステージに立ったという。映画館としても、昭和60年に幕を引いている。

町中を流れる東城川の川辺に降りて休憩。有栖川という優雅な呼び名もある清流だ。川底の古代の岩盤には、甌穴（おうけつ）と呼ばれる大小様々なくぼみが分布している。水面をよく見ると、川底の甌穴の影響で水流が渦巻いている箇所がある。城山に登った。「県史跡五品嶽城跡0・75km」の看板。国道314号線の歩道からコンクリートの階段を



五品嶽城跡の案内板（世直神社前）

上がる鳥居がある。石段を何度か折り返した先に世直（よなお）神社がある。前出の長尾隼人が城主のときに世直城と名前を変えたので、神社名もそれに倣ったのだろう。徳川時代に移行する息吹を感じる。

もとは豊宇気毘売神（とようけひめのかみ）を祭神とする王太子社と言ったそうだが、後に金毘羅神社や天満宮が合祀され、今では11の神様が祭られているという。世直から桃太郎侍の雄姿を連想してしまったが、ご利益も天下無敵？ 疫病

退散、世界平和を祈願。そして、熊に出遭いませんに……。

九十九折りの山道を登った。真夏の太陽を遮断する深緑だが、全身に汗が噴き出てくる。榎の平（かやのなる）、榎が平、太鼓の平と、途中の平地に名前が付けられている。榎の平の古井戸の遺構を覗き込むと、戦国武将たちの霊気が遺っているように、その深い闇に一瞬、汗が引いた。頭上からは、蝉の鳴声が降ってくる。アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、蝉のオーケストラだ。

頂上の常の丸は草が生い茂っていて見晴らしも悪く、井戸の遺構を確認しただけで早々に退散した。町中に戻って、中華屋さんで昼食。備後八幡駅まで歩く余力はなく、列車で帰ることにした。「猛暑日になるので、なるべく外出は避けてください」、朝の車のラジオで気象予報士が何度も警告していた。冷房の効いている駅の待合室が嬉しい。

13時39分発の落合行きに乗った。満員で、立っている人も多いのは驚いた。JRの次の廃線候補ナンバーワン？ 全国ニュースで度々取り上げられている恩恵か。ありがたいことだが、ガラガラの方を居心地良く思っている自分がある。旅人は我儘だ。

参考文献…「芸備線・中国山地の沿線物語」（武田祐三著）

「菊慈童を探して」

高柴順紀（菊栽培農家）

長生きを祈るしか術のない時代、菊がその役割を果たしていたようです。菊の水滴が健やかで長生きをもたらすという菊水の伝承でした。

この菊水の初出は中国後漢の書『風俗通義』であり、原文は次のようになっています。「南陽酈縣有甘谷、谷中水甘美、云其山上大有菊華、水從山上流下、得其滋液、谷中三十餘家、不復窄井、仰飲此水。上壽者百二三十、中者百餘歲、七八十者名之為无。菊華輕身益氣、令人堅強故也。」

日本ではこの酈縣（れいけん）の深山に慈童という童子を置いて菊の物語が始まっているのです。『太平記』（1370年）の中で語られている話

で、これを慈童の初出と考えている人は多いのですが、後醍醐天皇に立派な馬が献上されたという「龍馬進奏事」の章に記載されているので菊水が主題ではありません。勿論慈童は中国書には出てこないで日本人の誰かが創作したものを太平記の作者が引用したのではないかと思ひ、慈童譚の源を探して来ましたがなかなか行き当らず、何十年もたつてしまいました。しかし皮肉にもあの世が近くなつて、それもお経の中にあることを知ったのです。

なんと『往生要集』（985年）で世の人々に地獄の恐怖を植え付けた天台の僧、源信の創作だったのです。

源信は「妙法蓮華經觀世音菩薩普門品二十五」というお経を易しく理解させる為に菊水の説話を作つたに違いありません。

周の穆王（ぼくおう）が人足の駒で遊行中、釈尊が説法されている場所に行き当たります。釈尊はその場で穆王に「薩達磨分陀利伽索相攪」の十字を与え、代々の帝王はこれを秘匿して伝えていきました。時代は移り、秦の始皇帝に使っていた慈童という童子が誤つて王の枕を跨いだ罪であの酈縣の深山に流罪となりますが、これを憐れんだ王は釈尊から伝授された十字を与えます。慈童はこの文を常に唱えるのでした。このお陰で震動雷電する暗闇の恐怖や鬼神の災いから慈童は守られ彭祖という仙人になるのです。また慈童の前には菊がありその露が流れ下つた三十余家では五百歳という壽齡となり、これが後の世の菊水延齡の方術となつたとしています。源信は觀世音菩薩のごとく国王も慈悲、大悲有れば国土も静に万民も安穩であると説いています。『風俗通義』の菊に佛徳を加えたということでしょうか。

一方『太平記』では佛徳どころか、遊び惚ける後醍醐天皇はこの馬は吉か凶かと臣下に問うのでした。天皇

に媚びる臣下の一人は源信の説話を例に穆王は龍馬（八足の駒）を駆使して釈尊に会い、それが後の重陽の行事にまで繋がる訳だからこの馬も天皇に吉をもたらすものだと言います。反対に一人の臣下は首をかけた次のように諫言するのです。馬は馬に過ぎず、奇物を弄ぶことはやめて仁政につくされてはどうかと。天皇はたちまち顔色を変えてその場から立ち去つたとしてこの章は終わっています。

しかし太平記の中の慈童話は源信よりも物語を一般向けに内容も少し変えてあります。それで菊水の話が広がったのかもしれませんが。室町時代の百科事典『槩囊鈔（あいのうしゅう）』（1445年）にも太平記と同じ内容で菊水因縁が記載されています。慈童に菊（枕）を付けて「菊慈童（枕慈童）」にしたのは能の世界です。めでたい祝福の舞になつていようのですが、太平記を元にしていると言われています。絵画でも菊慈童を見る事も出来ず。

でもどうしたことか俺は常日頃、菊の露を浴びているのに上壽者どころか中者にもなれそうにないのです。おまけに菊慈童が地獄に導いてくれたのか・ヤレヤレ。



葛飾北斎「菊慈童図」
（「小樽芸術村」サイトより転載）

庄原の不確かな歴史ドラマ — 永江の庄から現代まで ⑦

「御維新」はうまみがあったのか

庄原の近代を作った人々

音谷 健郎

260年余続いた江戸幕府の下、今の庄原の町の骨格は出来たようです。そこで明治。明治の御維新で、何が変わったのでしょうか。何がつけ加えられたのでしょうか。探ってみます。

江戸時代の末期、幕府がお隣の長州藩を「征伐」するとの大命令を出したために、長州に接する広島藩は大騒ぎになったのでした。幕府は長州を4個所から攻め込むことにし、そのうち北の「石州口」を責める諸

藩が福山を出発し、上下、三良坂を経て三次に押し寄せました。庄原はこの進路から外れていたもので、明治維新の騒ぎは、違った形で現れました。

まず、その騒ぎの様子。『三次市史I』（2004年刊）は、「長州征伐」の項目を立てています。

米国からペリーが黒船で来航以降、幕藩体制が揺らぎ、薩摩・会津藩の公武合体派と、長州を中心とする倒幕派とが激しく争います。慶応元（1865）年、第14代将軍家茂（いえ

もち）は諸藩に号札し、第2次の長州追討に乗り出しました。この時、先鋒の福山藩などが「石州口」を目指して三次近辺に宿を取り、たむろしたから大変です。

『ふるさと歴史物語』（2001年刊、菁文社）せいぶんしゃ）によると、「三次を通過した軍隊は紀州藩、福山藩、それに幕府大坂講武所の鉄砲隊などで、福山藩の場合、軍勢千七百人（兵八百人、

軍夫九百人）（米丸嘉一）としていきます。地元からも数十人の軍夫が徴発されています。それだけではありません。村役人が召集され、「他国者に注意を」「動員には速やかに応じるように」と心構えのお達し。戦闘は終わっても軍夫の帰還は遅れ、輸送夫の動員は続いたので、「農作業が遅れることのないように」との通達が郡役所から出たりしました。

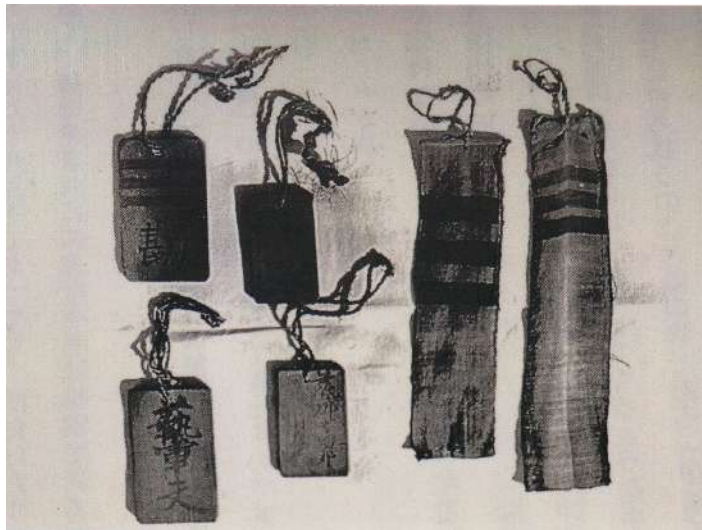
同慶応2年7月、家茂が急死し、追討は打ち切られたわけですが、『三次市史I』では、「幕府勢敗北の知らせが尾鰭（おびれ）を付けて広まり、人びとは長州の騎兵隊が進攻してくるそうだという風聞におびえた」とあり、幕藩体制への信頼はがた落ちとなったようです。

長州征伐を事もなくやり過ごした庄原では、明治になって「維新」の影が押し寄せてきます。村役場の新設に伴う「役場」の争奪戦です。江戸初期には、東城に町奉行・与力同心を配置し、西城に代官が駐在、後に三日市や高に代官所が置かれており、庄原は商業が繁盛している村に過ぎませんでした。

当然に起こった村役場の奪い合い。どのような経緯があったのでしょうか。まずは、村役場がどこに置かれる



①長州征伐で「石州口」へと進軍した行程



②征長軍の軍夫が着用した袖印と軍夫札
（『三次市史I』より）



③庄原村役所の開設の地である西明寺の正門



④西明寺の前にあった空き地に移った現在の市庁舎

かです。『庄原の歴史・通史編』（2005年刊）では、「中央集権体制の強化」「地方政治機構の形成」「近大産業の発達」など、仰々しい項目があるのですが、庄原村の「村役所」がどこに、どう開設されたのかは探せません。

あちこちの本をひっくり返している内に、「郡役所は元西城町にあったが、庄原の医師渡辺玄丹氏が時の県令に建白書を出して明治十五（1882）年庄原に移す動機を作った」との一文を『庄原新風土記』（岡本佳

男、1969年刊）の「市内役所はなし」のなかに見つけたのです。

さらに、「郡長は郡令を発し指揮監督した。高等官六、七等、従六、七位勲六等位いの肩書きの官吏で部下郡書記、技手、視学等十七、八人位の構成で県と町村の中間において行政任務を裁いた」と詳述しています。

では、どこで執務をとったのでしょうか。さらに続けて、「今日の市庁位置が旧西明寺内より移した郡役所があった場所である」とあります。平たく言い直せば、西明寺内で執務を

とっていたが、すぐ前の現市庁舎の位置に移し執務をとったというのです。土木出張所や農林事務所、郵便局などの開設の場所も述べています。やっと創成期の市行政の姿が見えてきました。

最後にひと言。手元の多くの本が、「明治維新」について制度の変革や欧化による近代化ばかり、を説いていますが肝心なのは、武士中心の「身分社会」が音を立てて崩れたことではないでしょうか。大名行列に出くわすと百姓、町民はその場に土下座

してやり過ごす社会が、世界のどこにあったでしょうか。武士に対して、町人を「切り捨て御免」と勝手に切り捨てる権限が与えられている社会が、どこにあるでしょうか。それを特に不思議と思わない人々とは何だったのでしょうか。

徳川幕府260余年が培ったこの身分社会の崩壊こそが、明治維新の本当の意義ではないでしょうか。今回は、「英学校の英語はどんな水準だったか」を探ってみます。

どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売（値札のないものは百円均一）。
毎週水曜日の朝に入荷予定。

●黒ニンニク好評販売中！●
（青森産ニンニクホワイト六片使用）

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの
効果が期待できます。

（80g入り 500円）

※売り切れのときはご容赦ください。

「植物画とは何か
—日本の植物図譜を中心に—」(9)

牧野富太郎は 1862(文久 2)年 4月 24日、土佐国佐川村(現在の高知県高岡郡佐川町)で酒造りの商家のひとり息子として生れた。

3歳のとき、父佐平が死去、5歳のとき、母久寿が病死、6歳のとき、祖父小左衛門が病死したので、その後は祖母浪子によって大切に育てられた。幼名は成太郎と呼ばれていたが、1868(明治1)年ごろ、富太郎と改名、1871(明治4)年、佐川村西谷土居謙護の寺子屋に入り、後に佐川村目細谷伊藤蘭林塾で学んだ(明治5年の説もある)。この頃より植物に興味を持ち、自宅の裏山の金峰神社でひとり草木と遊ぶ子どもであった。1872(明治5)年、深尾氏の郷校だった名教館で和漢の学問と同時に西洋の先端的な学問を学んだ(明治6年の説もある)。1874(明治7)年、佐川小学校へ入学した授業に飽き足らず、2年で退学、ところが2年後の1877(明治10)年、佐川小学校授業生(臨時教員)の依頼があり、15歳で教鞭をとることとなった。その後、1879(明治12)年6月、佐川小学校授業生を退職して、高知市へ出て弘田正郎の五松学会で学ぶうちに師範学校の教員永沼小一郎と出会い、西洋の植物学に触れ、小野蘭山の「本草綱目啓蒙」を知り、植物に関する知識を次第に深めていった。

1881(明治14)年4月、東京で開催中の「第2国内国勸業博覧会」の見物を兼ねて顕微鏡・参考書購入のため上京、知り合いを頼って訪れた博物局ではかねてから私淑する博物学者田中芳男と小野職愨(もとよし)の知遇を受けた。5月は日光で植物採集、6月は箱根、伊吹山などで植物採集して帰郷している。

1884(明治17)年4月、牧野富太郎は再び上京し、東京大学理学部植物学教室で矢田部良吉教授、松村任三郎助教授の許しを受けて大学の標本や文献を自由に利用できるようになり、植物研究の歩みを進め、日本植物志の編纂の志を抱いた。1886(明治19)年、石版印刷屋大田義二の工場に通い、石版印刷術を習得している。そして、1888(明治21)年11月12日、私費で「日本植物志圖篇」第1巻第1集を出版した。これにはキダチニンドウ(図1)が載せられている。そして、アケボノシユスラン(図2)は「日本植物志圖篇」第1巻第6集に掲載されている。「日本植物志圖篇」第1巻第6集が出版された1890(明治23)年には牧野富太郎が武州小岩村(現在は東京都江戸川区北小岩)の河川敷にある用水池でムジナモ(和名は牧野の命名)を発見、日本新産植物として植物学雑誌へ発表し、その年、小沢壽衛と結婚、そして、矢田部良吉教授から植物学教室への出入が禁じられる等、あわただしい年であった。

「日本植物志圖篇」の第1巻第11集を1891(明治24)年10月9日に出版したが、第12集の準備中、郷里から財産整理のため、帰郷するよう督促してきたので、11月、帰郷した。

圖篇の版下(原図)はすべて牧野が描き、日本橋区呉服橋(現在は中央区日本橋)にあった印刷会社で石版印刷し、神田区神保町(現在は千代田区神田神保町)にあった敬業社で販売してもらった。「日本植物志圖篇」の植物図がきわめて正確であると、ロシアの植物学者マキシモヴィッチから絶讃の辞が送られている。

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。



〈左写真〉帝釈峽・美古登地方植物採集会のととき林間
で一服する牧野富太郎博士
(1932年撮影、牧野植物園所蔵)

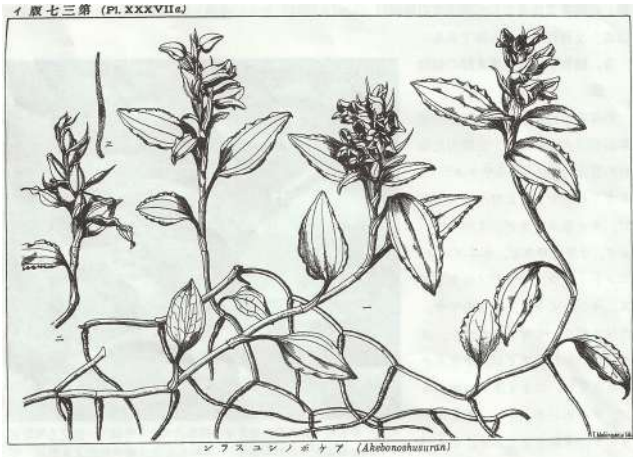


図2 アケボノシュスラン
(日本植物志圖篇第1巻第6集による)

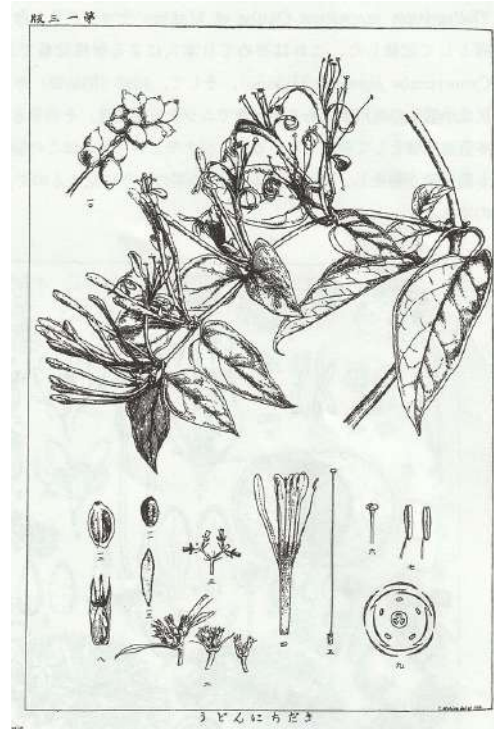


図1 キダチニンドウ
(日本植物志圖篇第1巻第1集による)



「つれづれ歌談」②7

松岡初枝

秋の夜空に煌々と輝く月は、人々の心を捕える不思議な力があります。ある男が女を口説く時「君は太陽のようだ」と言ったら「ギラギラの太陽は嫌なの」と振られたとか。涼し気な月と言えよよかったのに…。

・み空行く月の光にただ一目相見し人の夢にし見ゆる 安都屏娘(あとのとびらのおとめ)

空をゆく月の光に、ただ一度だけ逢った人が夢に出て来てしまうの…。娘は一夜だけの逢う瀬の人が忘れられない。あの日も月が美しかった。彼も月を見て娘を想っているのか、そうであればよいのですが…。

・月立ちてただ三日月の眉(まよ)根搔き日(け)長く恋ひし君に逢

へるかも 大伴坂上郎女

・振仰(さ)けて若月見れば一目見し人の眉引き思ほゆるかも

大伴家持

叔母と甥の掛け合いの歌で、郎女は、月が出て、きりつとした三日月眉を搔いたら、長いこと待ち焦れていた人に逢えたワ。眉がかゆいと吉兆。くしゃみも同様です。「家持、これに返す歌、詠んでみて。若いから無理かな」。三日月を仰ぎ見ると、ひと目見たあの人の眉引きを思い出すよ。「どうですか叔母様」「まあいいわね。才能あるワ」。初月、若月はまだほんの細い三日月で、細く、くつきりした眉は当時の美人の条件のひとつです。

・夕月夜心もしのに白露の置くこの庭に蟋蟀(こおろぎ)鳴くも

湯原王(ゆはらのおおきみ)

夕月の照る夜、白露置く庭にこおろぎが鳴いているよ。しんみりと感傷にひたる王。月、露、虫、秋てんこ盛りの歌です。

月は日々形を変え、呼び方も変化します。新月から満月(もちづき)その間には風情のある毎日の月。やっぱり思いを込めやすいのが月です。

扉が開閉するときの鈴が鳴って、五十年輩の男が入ってきた。初顔だった。旅行者なのか、大きなバックパックを背負っている。残暑も過ぎて、もう大丈夫だろうと天井の扇風機を回していないのだが、男の額の汗を見て、申し訳ない気がした。「お尋ねしたいことがあるのですが……」

古本目当ての客ではないようだ。

『偏愛日記文学館』のことですが……」

「ああ、正田さんがやっていたところですね」

男の双眸が輝いた。

正田さんは、東京の神保町にある老舗の古書店で長らく働いていた人で、日記文学の熱心なコレクターだった。

日記文学というと、日本では紀貫之の「土佐日記」や「和泉式部日記」、「紫式部日記」のような古典文学をイメージするが、正田さんは国内外を問わず、日記形式の書籍を貪欲に蒐集していた。

世界でいちばん有名な日記は「アンネの日記」だろうか。世界各国で翻訳・出版された「アンネの日記」のコレクションだけでもかなりの数になる。自家製本された稀覯本や墨

書の写本などの高額なオークションにも手を出していた。

自分の身辺を題材にした私小説という分野がある日本は、とりわけ日記文学とは相性が良いようで、近代でも永井荷風の「断腸亭日乗」や森鴎外の「独逸日記」、正岡子規の「病状日記」、石川啄木の「ローマ字日記」、内田百閒の「百鬼園日記帖」等々の名作がある。

偏愛日記文学館

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑦2

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

特に「断腸亭日乗」は、永井荷風の最高傑作と評価する文学者も多い。腸に持病のある荷風は自宅の一隅を断腸亭と名付け、自らを断腸亭主人と称した。日乗とは日記の別名。漢文調の文体で、日常のことや世相、読書、ときには遊郭や赤線のなじみの女性のことも書いている。

正田さんは還暦を過ぎて、空き家になっていた実家に一人、帰って来

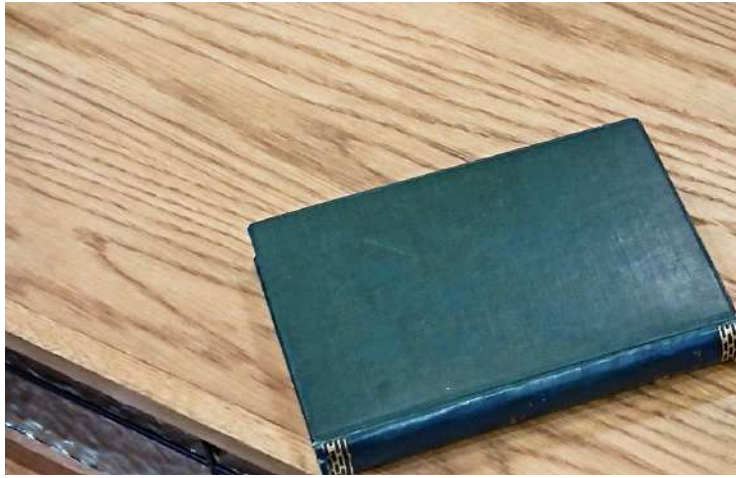
た。奥さんとは長年別居状態で、「今さら離婚するのも面倒」という関係だったらしい。昔、牛小屋だった納屋を改装して、「偏愛日記文学館」を開設、コレクションを展示していた。「虫干しだよ」と正田さんはうそぶいていた。車がないと行けないような辺鄙な場所で、「暇つぶしに来てもらっては困る」と入館料は三千元。それでも噂を聞いて、全国から研究

ているからこそこの日記を読ませたくないのだ。——しかしこれはうそだ！ 愛しているのも事実、読ませたくないのも事実だが、この二つは必ずしも関係していない。」

作者自身の弁明だが、わかるようではない。結局、ローマ字で書かれた日記は後年、日本語に翻訳（？）出版され、全集にも収められている。天邪鬼な啄木の悪戯だったのかもしれない。

日記の内容は、周囲に借金を重ねながら浪費を繰り返す破滅型の人間の日常が克明に描かれている。友人の尽力で朝日新聞に入社するのだが、仮病を使って何日も休み、たまたまに出社しても給料の前借りをして、女を買う。知人から借りた時計を勝手に質入れる。ダメ人間の愚痴を延々と聞かされているようだが、言葉に愛された男の文章は透明感があつて、虚無の中にもどこか愛嬌がある。

正田さんは三年ほど前に亡くなっている。後継者もなく、偏愛日記文学館も自然消滅、母屋を含めた建物は市の空き家バンクに登録されているが、いまだに買い手はついていない。そのことを、山田と名乗った客に説明した。



「文学館に展示されていた本や資料は、どうなったんでしょうか？」

「神保町の古本屋が引き取りに来ましたよ。値段がつかないようなものは、うちでもいくつか引き取りましたかね」

「その中に、個人の書いた日記はありませんでしたか？」

内心、ドキリとした。正田さんは、裏のコレクションがあった。作家ではなく、一般人の書いた日記そのものである。古書店に持ち込まれる膨大な古書籍の中には、手書きの

日記が紛れ込んでいることがある。売り物にはならないので返却を申し出るのだが、処分してくれと頼まれることも多い。そうした日記を、正田さんは各古書店にお願いして集めていたのである。

「おれは変態だよ。個人の秘密を盗み見て、喜んでるんだからな」

正田さんは、前歯が一本、抜けた歯を見せて笑った。

「二年前に母親が亡くなりましたね。遺品を整理していたら、箱の中に入った手紙の束が出てきたんです。恋文でした」

山田さんの恋文という古風な言葉が、なまめかしく聞こえた。差出人は、母親が若い頃に参加していた短歌の結社の同人仲間だという。

「手紙の住所を訪ねてみたんですが、その方はもう亡くなっていました。息子さんが親切に対応してくれたのですが、そのときに日記のことを聞いたんです。蔵書を引き取ってもらった神保町の古書店から、おやじの日記が見つかったと連絡があったと。取りに行きますと答えたまま、そのままになっていたらしい」

それで神保町の古書店を訪れ、正田さんの名前を知り、「偏愛日記文学館」の存在を知って、うちの古本

屋までたどり着いたのである。その執念はいったい……。

「実はわたし、父親の顔を知らないんです。ひよっとしたらと思いきいね」

わたしの気持ちを察したのか、答えを教えてくださいました。

「残念ですが、個人情報に配慮して、個人の日記は全部、焼却処分したと聞いています」

「そうですか……」

落胆を隠せない。

「でも、これですっきりしました。残念ですが、諦めます」

そう言って頭を下げる山田さんに、もう少しで声をかけそうになった。

正田さんは焼却処分しようとしたが、できなかつたのだ。

「そうだな、半世紀も寝かせれば、その時代の貴重な資料になるかもしれないぞ」

強引に持ち込まれた段ボール箱が三つ、台所の床下で眠っている。

「おれ、そんなに長生きできませんよ」

「そのときは、焼くなり捨てるなり好きにしてくれ」

正田さんは、変態で悪人である。

「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

何度でも、できるまで繰り返すと、必ず最後には「できる」を体感できます。数字の順序も、最初からたくさんの数を覚えさせるのではなく、2～3からスタートするといいですね。乳幼児には、絵を見て楽しめる絵本を読んであげましょう。気に入った本は、「もう一回読んで」と催促されます。何度でも読んであげましょう。繰り返しながら言葉の世界を広げていき、視野の広い子に成長してほしいですね。



体験学習受付中！！ お気軽に問い合わせくださいね。

対象者：0歳～小学6年生

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

◇二百十日と二百二十日立春から数えて二百十日目、二百二十日目をそれぞれ二百十日、二百二十日という。

新暦では、二百十日は九月一日に当たり、二百二十日は九月十日頃になる。この頃は稲の開花期、台風シーズンにあたり、警戒すべき日として、昔から二大厄日の一つとして恐れられていた。俗にいう荒日であり、暦に記載され、農家にとっては重要な暦注となっている。

二百十日は、古くは暦に記載されていなかった。暦にこの二つが載りだしたのは、明暦二年（一六五五年）の伊勢暦、寛文十一年（一六七一年）の京暦に八十八夜とともに二百十日が記載されていた。そして、幕府天文方で、貞享元年（一六八四年）の貞享暦の創始者渋川春海は、この二百十日と二百二十日を重視し、それがなかつた江戸暦に、暦注として特記するようにした。これを機に全国に伝わっていったようである。

統計的に台風は、二百十日よりも

二百二十日の方を警戒する必要があると、気象関係者は観ているようである。

◇彼岸 春・秋の二期の彼岸会のことである。二十四節気の春分・秋分の日を中日として、それぞれ前後三日間、計七日間を彼岸という。

春の彼岸は新暦の三月十八〜十九日頃に入り、二十四、五日頃までで、



秋の彼岸は九月二十日ないし二十一日頃から入り二十六、七日頃まで。

彼岸の初日を「彼岸の入り」、最終日を「彼岸の明け」という。彼岸の間、諸寺で行われる仏事を彼岸会という。

民間でも仏壇を掃除して、お萩（春の彼岸は「牡丹餅」に対し、秋の彼岸は「お萩」と呼ぶ）・団子・のり巻き・稲荷寿司などをお供えし先祖や亡くなった人の冥福を祈ったり、お墓参りをする習慣になっている。彼岸は本来、この七日間にわたって行われる法会（彼岸会）のことである。

彼岸という言葉は仏教語で、此岸の対語である。此岸はこちら側の岸で煩惱多き現世のこと。彼岸はあちら側の岸で、阿弥陀如来の住む理想の涅槃（ねはん）の世界、極楽浄土のことである。彼岸は日本独特のもので、もともと仏教における祭事であったものが、暦に記載されるようになって雑節となった。

最初の彼岸会は、大同元年（八〇六年）崇道（すどう）天皇（故早良親王、はやしんのう）霊を慰めるために行われた。そして、平安初期から民間でも、日本独自の習俗に仏教行事が結びつき広まりはじめる。その後、時代によっては一定していないで、春分・秋分に近い頃に行われたり、

春分・秋分がとつくに終わってから行われたりした。今日のように春分・秋分が前後七日間のお彼岸の中日に当たるようになったのは、江戸時代の終り頃からである。

彼岸の頃になると、寒暑ともにようやく峠を越して「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉どおりにしのぎやすくなってくる。彼岸は季節のかわりめでもある。春の彼岸の場合は、この日以後、昼が長くなり、夏至でいけばん長くなる。

◇社日 一年に二回あり、春分と秋分に最も近い戊の日をいう。

春の社日を春社、秋の社日を秋社といい、農家にとっては極めて重要な日とされた。春社はちようど種まきの頃で五穀豊穰を祈り、秋社は収穫の頃で初穂を供えて収穫を感謝する日である。

社とは本来、産土（うぶすな）の神（土地の神）のことで、その祭日という意味である。古代中国では土地の神を祀り、人々が集まって一緒に飲食をする習慣があったのがわが国に伝来した。地方によれば、お萩や団子を供えるところもある。

（著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。「旧暦カレンダー」普及に尽力している。）

海外旅行ツアー・コンダクター・エピソード⑩

アラスカ編2・「船の豪華なダイナー」と 豪快なアラスカ鉄道」

山崎 允 まこと

プリンセスクルーズの朝食と夕食の決まりごと。約3000人に近い船客に対応するため朝6時、夕方6時からのファースト・シッピング、朝8時、夕方8時からのセカンド・シッピングに分けられている。毎食豪華なフルコースダイナーが売り物のため、事前にメニューを手に入れ、自室で電子辞書を片手に、「メイ・デイツシユ、料理法、ソース、デザート」の下調べをして、食事前の説明に備えた。

アラスカクルーズで目を引いた食事は「ハリバット」、日本名はオヒョウで、今までに聞いたことのない魚名だったが、カレイの仲間と知って親しみをもった。体長約2メートルにも達するそうで、昔北海道の漁師さんは「畳一畳」にもなると言っていたそうだ。日本のカレイと同じ淡白な味だったので、持参した醤油のバックが好評だった。

その他、ご当地名物の蟹、ロブスターが出て来る。食事の合間のワゴ

ンサービスで、派手に炎をあけて、イタリア人コックがお客のそばで料理してくれた。自分の胃を守るため、少しずつ残してもらおう「ビフォー・ケア」、食べすぎたかなーと思ったら胃腸薬の分包を飲んでもらう「アフター・ケア」を心掛けた。

余談だが、鮭の卵の「イクラ」はアラスカでは昔は捨てられていた。それに気付いた日本の商社が大量に



買い入れる契約を結んだそうだ。すし屋や回転寿司でイクラを注文するときには、このことを思い出してくださいと付け加えた。

鏡のように波静かな湾のことを「インサイドパッセージ」と言い、ケチカン、スキヤグウエー、ジュノーの内海航路のクルーズを終え、次は空をチャーター機でフェアバンクスに飛んだ。フェアバンクスはアラスカ鉄道北端でオーロラがよく見られる地として知られている。

鮭たちが川を遡上するありさまを見学。鮭たちはその先で自動的に捕獲され、工場で缶詰に加工される。鮭たちのエンディングを目の当たりにして虚しさを感じた。雪はないけれど、犬橇のデモンストレーションで地元民の冬の体験を想像することも出来た。

当地からクルーズ社と提携したアラスカ鉄道に乗り込んだ。重連のディーゼル機関車は日本のものの2倍の高さ、長さも2倍で大きい。ハイライトのデナリ公園に向けて、轟音を響かせながら進んだ。天井が透明なガラス張りの「ドームカー」では、前方上方から切り開かれた崖や岩山などが迫って来て、凄い迫力だ。まるでジュラシック・パークの乗り物のようだった。

のようだった。

アラスカ内陸部へ生活物資を運ぶこのアラスカ鉄道は、日本の新幹線と同じ軌道(ゲージ)で幅1435mm、在来線の軌道(芸備線も含む)より36・8mmも広いため、ディーゼル機関車の図体も大きく、梯子を掛けないと運転席に届かないのではと余計な心配をした。食堂車も広いので、ジョークの好きなアメリカ人は「ダンスもできるよ!」と言って笑った。全長760km(日本では東京から岡山まで732・9km)、冬場は週末に1便、それ以外は毎日1便で、途中駅がないところでは、フラグ・ストップと言って手を上げたら止まってくれるそうだ。

デナリ山(旧マッキンリー山)約6200mはアラスカ最高峰。探検家植村直巳さんが1984年に氷河のクレパス(割れ目)に滑落して「帰らぬ人」となったままだ。宿泊ロッジは室内から眺望するデナリ(現地語で「偉大な」の意味)を借景にして窓枠が額縁となり、朝な夕に「美しいなく!」と感嘆の声を上げたものだ。まるで美術館の最高の絵を独り占めしたような気分。

翌日、植村さんに別れを告げた。いつか会える日が来るだろうか?

どらくる俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

葬列を見送る案山子棚田村

近藤 昌平

難聴や聞き留めている蝉時雨

富久光

敗戦の記憶薄れる終戦日

片岡 正人

お隣と打ち上げ花火競うかな

隆愚

大人等に混り鮎掛け五年生

大槇 三代子

若者に席ゆずられしお盆かな

寺内 龍二

砲雷いかずちや祈ることしかできぬ吾

赤川 冬人

祇園会に百五十年を経て再建なる

松岡 初枝

鷹山たかやまのすがた疫病よ去れ

投稿&寄稿

候のことば

「秋の七草」

隆愚

萩(はぎ)、すすき、葛(くず)、
なでしこ、おみなえし、藤袴(ふじ
ばかま)、桔梗。万葉集で山上憶良(や
まのうえのおくら)が秋の七草を

歌っています。
いちどに咲くのではなく、秋が深
まりながら花開いていく七種の草
花。たとえば萩は、万葉集で最も歌
われる花。秋の字が用いられるほど、
秋の花としてなじみ深いものです。
逆に、藤袴や桔梗は、自生できる野
山が少なくなり、絶滅に瀕している
とか。種を絶やさぬように、人の手

で育て守ろうとする動きも出ている
有様です。

秋の野に咲きたる花を指(および)
折り かき数ふれば七草の花

山上憶良

「分水嶺」

赤川仁洋

芸備線ストロールで、気になる道
路標識がある。備後落合駅の前の、
183号線と314号線が合流した
国道を進むと、道路は再び分岐する。
トンネルの方にまっすぐ進めば18
3号線で、右に折れれば314号線

である。

314号線の坂を登り切ったところ
にその標識はある。「分水嶺標高
638m」の看板。そのすぐ先に、
庄原市東城町の標識がある。つまり、
西城町と東城町の境の位置に、分水
嶺があるのである。

分水界ともいう。異なる水系の境
界を示す地理用語で、山岳において
は稜線と一致していることが多い。
水は高い所から低い所に流れるのが
自然法則で、分水嶺を境にして、降っ
た雨が違う方向に流れる。西城町側
に降った雨は西城川から江の川、そ
して日本海に注ぐ。東城町側に降っ
た雨は東城川(成羽川)から高梁川
へ出て、瀬戸内海、そして遙か太平
洋へと流れ出る。

一見すると平坦な土地にも分水嶺
は存在していて、安芸高田市向原町
戸島の「分水界泣き別れ」は平坦な
水田の中にある。府中市上下町は分
水嶺上に位置する町で、水が上(山
陰方面)と下(山陽方面)に別れる
のが町名の由来だという説がある。
芸備線ストロールで、歩いていて
方向感覚がおかしくなる時があるの
だが、川の流れも影響しているのか
もしれない。この分水嶺を境にして、
川の流れが逆方向になるのである。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

一 硬式テニス参加者募集 一

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

・火曜日 (9:30 ~ 12:00)

・水曜日 (9:30 ~ 12:00)

・土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎070-8991-1682)



《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
- 教室&講座案内
- イベント情報
- あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

マック☆ヤマザキ 海外スケッチ展



本誌「海外旅行ツアーコンダクター」の連載でお馴染みの山崎允さん(マック・ヤマザキ)が、アメリカ・ロスアンジェルスのディズニーランドとユニバーサルスタジオで描いたスケッチや、家族旅行で訪れたインドネシア・バリ島、JICA シニアボランティアで駐在した Zambia 共和国の3年間に描いたスケッチを展示します。ご自身の分身だというスケッチを観ながら、貴重な体験談を聞けるかもしれません。

期間：9月17日(土) ~ 9月30日(金)

場所：東城まちなか交流施設えびす (☎08477-3-0788、木曜休み)

九日市「リサイクル市」出店者募集中!

10月9日(日)の九日市において、フリマ形式のリサイクル市を開催する予定です。

ご家庭にある不要品を販売してみませんか?

あなたにとっては不要でも、探している人がいるかもしれません。

出店料は無料です!

※スペースが限られているので、大型の商品はご遠慮ください。

搬入搬出は自己責任でお願いします。

申込先：九日市愛好会事務局 (☎0824-72-8285)



編集後記

◇今回の「今月の三冊」はお休みです。

◇芸備線ストロール、東城まで行きました。が、次回は岡山県の野馳駅の予定です。廃線の危機の中、県内外にこだわる状況ではない

ですからね。県を跨いでのお互いの行き来が増えればいいですし、わたし自身、興味が

あります。
◇季刊誌「Grandeひろしま」の秋(38)号に、わたし赤川が「芸備線ぶらぶら散歩」を寄稿しています(4回連載予定)。同誌の今回の特集は「民藝」、読み応えがあります。郷土愛溢れる情報が満載です。
◇27日、庄原よいとこ祭が久しぶりに復活。威勢のいい踊りに元気をいただきました。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183

協賛: 九日市愛好会

第 252 回

しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 4 年 9 月 9 日 (金) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

9 月 9 日 (金) 10:00~14:00

お茶席/庄原茶道連盟

★どら書房→休憩所あります！！

月曜日と火曜日はお休み

但し、九日市の日は営業します。

★カフェクラウド→タピオカドリンク 100 円引き

九日市特製ピタサンド 600 円

★楽笑座「まかない食堂」中止

「うた声喫茶」開催 13:30~15:00

★風龍→九日市スペシャルで餃子 200 円！

★HONMACHI STAND→コーヒー 100 円引き

10 月 9 日 (日) 九日市において、フリマ形式の「リサイクル市」を開催します！出店料は無料です。出店申込は九日市愛好会事務局まで。

楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

出店配置図



出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

